

2024 年度イラン短期研修プログラム報告書

上智大学総合グローバル学部 4 年

はじめに

本報告書は、2025 年 2 月に約 10 日間の日程で参加させていただいた笹川平和財団イラン短期研修に関するものである。研修では、受け入れ先であるテヘラン北部の国際関係学院（SIR）の学生とのディスカッションや日本についてのプレゼンテーションに加え、地方都市であるイスファハーンとカーシャーンの訪問を行った。この研修を通じて、メディアや書籍等では知ることのできないイラン社会のさまざまな側面に触れることができ、研修前に抱いていたイランのイメージが大きく変わる貴重な経験となった。また、渡航の直前まで、イランとイスラエルの情勢悪化やトランプ政権の誕生、シリアのアサド政権崩壊などイランを取り巻く中東地域で情勢を不安定にさせる動きが相次ぎ、研修が予定通り催行されるか不透明な日々が続いた。そのような中、イラン訪問を実現させるためにご尽力いただいた笹川平和財団および SIR の関係者の皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げる。

イランとアメリカ

私はアメリカ政治を専門分野として学んでいるため、今回の研修ではイランの人々がアメリカをどのように捉えているのかを知ることが一つの目標だった。イランは国際的に「反米国家」と見られがちであり、実際に SIR の学生たちがアメリカに対して好意的であるとは言えなかった。しかし、彼らのアメリカに対する見方は一様に否定的なものではなく、アメリカの文化や国民そのものを拒絶しているわけではないように感じた。彼らの批判の対象は、あくまでアメリカ政府の外交姿勢や政策に向けられたものであり、その点はとても理性的かつ冷静な姿勢だと印象に残った。

イラン人学生と接して驚いたのは、彼らはみなインスタグラムのアカウントを持っており、そこを通じて欧米のメディアや著名な政治家の発言に日々触れているということだ。イランではインターネット規制があるものの、SNS や VPN を使用して、海外の情報に積極的にアクセスしているようだった。彼らはアメリカや欧米諸国の動向に強い関心を持ち、イランが国際社会でどのように受け止められているのかについて、よく理解しているという印象を受けた。また、SIR の学生は外交官を目指すエリート学生であるため、みな高度な英語力を持っており、欧米研究者の著作を含むさまざまな国際関係論に関する書籍や論文を読み込んだうえで私たちと議論しているように思った。特に、イ

ラン・アメリカ外交やパレスチナ問題に関してディスカッションを行った際には、その知識量とプラクティカルな解決策を模索する姿勢に圧倒された。

テヘランではイラン人学生とともに「聖なる防衛博物館」と呼ばれるイラン・イラク戦争に関する博物館を訪れた。そこで彼らが最も強調していたのは、戦争はイラクによる一方的な侵略戦争であったことと、米国をはじめ欧米諸国やソ連までもがイラクを支援したという不条理さだ。この戦争は冷戦中の 1980 年代に発生した。冷戦時代は米ソの直接的対立を回避するために朝鮮半島やベトナムなど世界各地で代理戦争が勃発した。しかし、イラン・イラク戦争は代理戦争ではなく、米ソ両国がイランと敵対したという辛い記憶が現在の反米姿勢の一因となっていると言う。近年では、第一次トランプ政権によるイラン核合意(JCPOA)の離脱と経済制裁の再開、それに伴う物価の上昇によって、イラン国民のアメリカに対する不信感が高まっていると話していた。ただし、カタールのドーハからテヘランへ向かう飛行機で隣席に座っていた 10 歳くらいの女の子は、機内でディズニー映画『リトル・マーメイド』を鑑賞していた。また、イランのレストランでは常にコカ・コーラやスプライトが提供された。このように、アメリカの文化的影響力はイランの至るところで感じる事ができた。

日本・アメリカ・イラン関係の今後

日本は日米同盟を基軸とした安全保障体制を維持し、欧米諸国と歩調を合わせた外交政策を展開している。一方、2024 年 7 月にイラン大統領選挙で勝利したペゼシュキアンに対して岸田首相（当時）が祝辞を送るなど、日本の対イラン政策は比較的穏健であり、必ずしも欧米諸国と同様であるわけではない。こうした日本の独自外交という視点から、日本がイランの平和と安定にどのように貢献できるのか考えたい。

私たちがイランへ渡航したのは、アメリカで第二次トランプ政権が誕生した約三週間後であり、中東を含めた国際秩序が変化しつつある時期だった。なかでも、私たちがテヘランに着いた翌日（2月14日）にドイツ・ミュンヘンでアメリカのヴァンス副大統領が行った演説は、アメリカ主導の国際安全保障の枠組みを大きく変更すると宣言したに等しかった。欧州諸国みずからが「自分たちの防衛のために大幅に強化」しなければならないと発言したヴァンスについて、駐イラン大使の塚田大使は衝撃を受けたという。また、およそ 87 年前にヒトラーへの宥和政策が話し合われたミュンヘンという地で演説が行われたことも、象徴的だと語ってくださった。

アメリカが長きにわたって培ってきたヨーロッパとの同盟や日米関係を見直そうとするなか、日本はより主体的に中東外交を展開し、イランとの関係を独自に強化することができるのではないかと考えられる。日本は比較的中立的な立場から中東諸国と良好

な関係を築いてきた歴史がある。イランと欧米諸国の対立が続く中で、日本が両者の対話の橋渡し役となることを期待する。

また、イランと日本は古くからシルクロードを通じて間接的に交流をしており、文化面では似た部分がある。例えば、ある SIR の学生は、京都の二条城を訪れた際に門の形や装飾がイランのモスクと似ていると感じたと教えてくれた。こうした文化的共通点は、人的交流や観光を通じた民間レベルのつながりが求められている現在、両国の相互理解を深める上で重要な役割を果たしている。日本のアニメや漫画はイランの若者を中心に人気を得ており、ペルシア語版の『ワンピース』が売られていた。

最後に

私自身、今回のイラン渡航を通じて、現地の学生と直接対話し、文化や社会に対する理解を深める貴重な経験を得ることができた。イランがニュースとして取り上げられる際にはネガティブな内容であることが多いが故に、誤解されやすい国だと思う。だからこそ、私が現地で出会った人々の温かさや豊かな文化、そしてイラン社会の多様な側面について積極的に周囲に伝えていくことが重要だと感じている。こうした発信を通じて、日本とイランの相互理解を深める一助となり、両国の交流がより活発になることを願う。